

高伯起に復するの書

三浦 晋

鎮西の三浦晋、謹みて書を平安の葛陂先生に復す。晋本窮郷の一農、何の幸ぞ顧を大邦の君子に受けしは。三四たび捧げ読みて慚喜交々至る。長俊卿は我が友の善なる者なり、久しく嘔喩を受け、以て函丈に侍り、益を請ふの暇妄譚して晋に及ぶ。晋の幸なりと雖ども、亦以て長者の聴を辱うす。俊卿罪有り。且俊卿、晋の著はす所の敢語を以て敢て之を左右に進む。左右察せず、叨りに称論を加ふ。慚喜復増々甚し。是より先、左右晋の物産を好むを聞き、遠く奇品数種を恵む。之を櫝に蔵し、永く以て野人の栄と為す。嗚呼東西の地、海隔り山置り、未だ其の紫宇に接し其の警咳を奉ぜざれば、則ち邈焉として遯し。然りと雖も俊卿有りて能く之に先後左右し、其の交生なりと雖も、而かも其の情已に熟す。此れより往、將に起居の候をなさんとし、因つて思ふに、士の相与にする、各々其の持する所を知らざれば、則ち將に郷里の相善き者之れに若かざらんとす。然りと雖も人の持する所は、父も以て其の子に諭す能はず、君も以て其の臣に命ずる能はず。天下広しと雖も、人衆多しと雖も、其の同じからざるは將に其の面の如くならんとす、何ぞ能く己の若き者を得て而して後相与にせん。然れば則ち已むか。何すれぞ其れ已む可けんや。之を服食に譬へんに、綾羅錦繡は其の品を同じくせざるも均しく之を身を蔽ふに取り、穀肉酒果は其の物を同じくせざるも均しく之を性を養ふに取る。然れば則ち其の持する所を同じくせずと雖ども、而かも其の善に志すに於ては蓋し一なり。其の

所謂善とは何ぞ。言ひて忠信、行ひて篤敬、入りては則ち孝、出でては即ち弟、退いては能く己を修め、進みては能く人を安んず。是に於て其の同じからざることを面の如き者を移して、將に異らざることも亦其の面の如くせんとするなり。今天下の士、己の持する所に執して以て彼の持する所に尚らんと欲し、聚訟紛紛、其の党を駆つて己の持せざる所を持する者を襲ふ。是に於てか、或は儒なり、或は仏なり、下れば則ち諸子百家なり。猶尚已まず、儒は儒中に相闘ぎ、仏は仏中に相毀ち、諸子百家諸家の中に相闘ふ。是れ猶一簞の食を執り羽毛鱗介の味を此に同じくせざるを非とし、一豆の羹を執り湯液醪醴の滋を此に同じくせざるを悪むがごとし。然りと雖ども、世又、我亦醴を嗜み人亦醴を嗜み、我亦酒を嗜み人亦酒を嗜むあれば、則ち同と不同と亦其の面の如く然り。則ち長者の嗜む所と雖ども、薑か、昌歎か、膾炙か、羊棗か、其れ未だ知る可からざるなり。亦何ぞ傷まんや。晋僻地に生長し、定省に人無く家累の裨益たるを以て、之を四方に游観質問すること能はず。三餘偶一二典籍を読むも、復益を請ふ所無し。是に於て、勢ひ其の自得する者はとせざるを得ず。而るに今や犬馬の齒五十に四を過ぐ。自らは是とする者痼にして復醫すべからず。晋垂髻未だ書を読むを知らざるの前、疑を天地造化に懐き、時有つて寢食を廃す。既にして書を読むを知つて諸を求め、人に接するを得て諸を人に探るも、疑塊融けず。年弱冠を過ぎ、始めて天地の形体を西学にて喜ぶ。形体微する所有りと雖ども、亦地体此の如く天行此の如しと言ふに過ぎず。則ち唯様に依つて胡蘆を画くのみ。向に喜ぶ所の者は疑ふ所に益無し。歳二十有九、始めて、氣に観る有り、漸く天地に條理有るを知る。是に於て、世の天地を説き陰陽を説くも皆痒を靴に隔つるを覚ゆ。嘗て人と之を譚して意を盡さざるに由り、為に玄語を著はす。草を宝曆癸酉に起す。唯諸を天地に求め、古に援くに違あらず。覚る者察せず、旧套に執して転責す。竟に頬舌を事す有り、之を贅語と為す。宝曆丙子に舩む。唯才驚にして事広し。玄〔語〕は稿

を換ふること二十有三、贅〔語〕は十有一に至る、今に於て成らず。敢〔語〕は則ち長者已に目を寓せらる。
 乃ち贅語の餘意、彝倫の叙する所を考へて、自ら量らず竊かに後世作者に俟つの意有り。斯くて宝曆庚辰に
 肇め、四たび稿を換へ、癸未に至つて成る。并せて梅園三語と為す。蓋し條理を繹ぬるに法有り。其の法は則
 ち反觀合一、微を正に依るなり。其の既に之を得れば、一より剖析し、一綱万目、條有つて紊れず。流れに溯
 り派を合す、猶周の子孫其の麗億るべからざるも諸を一后稷に帰するがごとし。夫れ條理とは一一なり。一
 一之れ陰陽たり。一一は陰陽の未だ各名有らざるなり。陰陽は一一の各定名有るなり。一一は本一、一は即
 ち一一、合して罅縫無く、分れて條理有り。而して其の態たるや、居を同じうし道を異にし、力を均しうし跡
 を反す。群兎庭に聚つて独樂を弄ぶ、此れに就いて之を觀るに、此の態を遺す莫し。夫れ独樂の動く、居を一
 転中と同じうし、道を来去に分つ。去る者は諸を來る者に尚ふこと能はず、來る者は諸を去る者に尚ふこ
 と能はず。而して其の顛倒するに至れば、去と來と同じきのみ。其の分るるや條理有り、合ふや罅縫無きは、
 非か。世穎悟に乏しからずと雖ども、此れを以て符を天地に合することを為さず。其の臆に得る者に執して、
 之を天地に推さんと欲す。人の天地に異なるは、即ち人の天地に於けるが如し。苟くも水を推して火を識ら
 んと欲し、冬を推して夏を識らんと欲するは、亦智の拙なり。曰く、山を隔てて烟を看、早や
 かに是れ火なるを知り、牆を隔てて角を看、早やかに是れ牛なるを知ると。是れ捷しと雖も、亦推の術なり。
 苟くも之を反觀すれば、則ち其の烟を望むや水を知る可し、角を見るや馬を知るに足る。請ふ、試みに一一
 を挙げて之を例せん。蓋し月を以て日に対し、木を以て金に対するは、古今の定議なり。然りと雖ども條理の
 正に非ず。對に反比有り。反を正と為し比を傍と為す。蓋し日は天に聚まるの陽物なり、之を反すれば、則ち
 地に散ずるの陰氣を觀る。其の陽天に麗はしくして地を充せば、則ち其の陰地に就いて天を充たす。日の照

す所、物有つて之を蔽へば則ち影す。影は乃ち其の物なり。唯人未だ之を天に推さず、彼の蒼き者を膽て終に之を天に歸す。莊子或は遠きの致す所と疑ふ。西洋の学、天文地理を以て四海に独歩す。人の知らざるに乗じて之を給いて曰く、月下の水氣積んで青を為し、日天に至れば則ち火氣積るを為すと。嗚呼西人奇巧有りと雖も、豈羽翼を作り彼の蒼蒼を凌ぎ以て日辺に至らんや。瞎人驢に騎り其の驢を見ず、其の見ざるを侮つて之に謂つて駝と曰ふ、豈其れ可ならんや。日物を以て明を發し、影氣を以て暗を收む。日力盡くる所、暗散じて之を囲み、以て彼の穹窿の青を醸す。青を醸すとは、近く取つて之を水に於て言はんに、水色本淡なるを以て底に徹る。維れ石維れ魚、歴歴として辨ず可し。積みて又積めば、鼃蟄するか龍鱣蔵するか、深碧底を見ず。蓋し水淡なりと雖も、積みて厚ければ則ち勢ひ明を遮る。明の遮る所は乃ち暗の畜ふる所、相得て青を為す、猶青黄縁を醸し青紅紫を醸すがごとし。余嘗て対を挙げて人に問うて曰く、陽象天に繋り能く地上を照して昼たらしむる者に反するの状如何と。孰か豈陰氣地に就き能く天下を蔽ひて夜たらしむる者を言はざるを得んや。是に於てか、日は影と偶す。是を以て、月の日に於ける水火の分有りと雖も、已に象を比し行を比せば、同じく天を周りて地を照す。斯れ焉んぞ能く夜と為さんや。木は艸の偶、艸木を并せて植と為す。彼の鳥獸を并せて動と為す者と対す。是を以て、動は有意有作、氣温にして体動き、地を離れて横旋す。植は無意無作、氣冷にして体止まり、地に著いて豎立す。是に於てか、動は則ち本を上とし末を下とし、肢を分つて下垂す、下垂する所の者は其の數定め有り。植は則ち本を下とし末を上とし、枝を分つて上仰す、上仰する所の者は其の數定め無し。動は則ち内虚し、故に飲食の養を内に取る。植は則ち内実つ、故に水土の養を外に取る。而して其の取るや、動は則ち上より降り、植は則ち下より升る。動は則ち牝牡相感じて子を内に託し、植は則ち独立して応ずる有りて子を上頭に結ぶ。若し目擾擾に眩めば、霄壤の間物と

して紀極すべからず。若し條理を以て之を推せば、天地体を立し水火性を成し、性体綱縊、唯一動一植と化す。天地も亦簡なる哉。唯水陸居を分ち、魚龍藻樹と鳥獸艸木を分立す。此に骨を内する者を反して、骨を外する者を龜蟹に觀、此に岐然たる者を反して、塊然たる者を螺蚌に得。陸植の生を土に著くる者を反して、水植の生を石に著くる者を觀る。夫れ天は虚にして動き、地は実にして止まる。実止の体、堅軟を土石に分つ。土の体は軟にして脆、其の黏なる者を埴と為す。石の体は堅にして脆、其の黏なる者を金と為す。天は氣なり、地は物なり。氣は其の体を没し、物は其の体を露す。人其の体を没する者を觀て、空無の見を生ず。案上頼るに水注有り。苟くも意を留めて之を玩すれば、此の一頑物も我が為に以て惑ひを解く可し。水注の製、必ず二孔を鑿つ。一孔は氣を通じ、一孔は水を通す。水入れば則ち氣出で、氣入れば則ち水出づ。已に氣と水と並び立ち各其の居を争ふ。出づるに門有り、居るに室有り、空無其れ然らんや。今没体なれば斥して無と曰ひ、露体なれば斥して有と曰ふ、是れ猶、明は則ち能く地彩を通じて天象を蔽ひ、暗は則ち能く天象を通じて地彩を蔽ふを察せずして、徒らに明は能く物を見はし暗は物を見はず能はずと曰ふがごとし。思ひの精しからざるなり。没して虚す、露して実す。虚実の体を并せて、大物正に成る。近く取つて之を人に於て言はんには、其の体は地質を飲食するに立し、其の神は天氣を嘘囂するに活す。夫れ魚は游潜跳躍を水に極むと雖ども、而も其の技は水に盡く。若し己れの水を措き、己れの魚を捨て、之を水を出づるに反すれば、乃ち水外斯の天地有るを知らん。今鳥をして水に入らしむれば則ち死し、魚をして水を出でしむれば則ち死す。我の活くる所、之を彼に施せば則ち死し、彼の活くる所、之を此れに施せば則ち死す。則ち正対は之を反觀すべきなり、之を推拏すべからざるなり。故に、人已に在る者を人に推すは、乃ち柯を執つて柯を伐るの事、乃ち人に接するの道なり。己に在る者を天に推すは、乃ち木に縁つて魚を求むるの術、天を知るの道に

非ざるなり。蚩の腹は夜に入れば則ち耿耿、日出でて之を見れば殷なり。夜の觀る所を携へて之を昼に施さんと欲す、夜に是なりと雖ども昼に於ては則ち非なり。故に人、人の神を以てし、人の物を用ひ、己を提げて己に非ざるの地に適くとも、終に己に非ざる者を得ず。斯に人有り、其の手燭を秉り、其の意暗を索む、豈得べけんや。是の故に、死は生の反、生を提げて而して往かざれば、死何ぞ知り難からんや。而るに爾為さず、淑慝憂虞相携へて去る。泰山の令を見ずして必ず閻羅王と為す。念頭之を畜へ、膀胱の間種種の奇怪を生む。生は眼裡の華、化者何ぞ与からんや。人は有意なり、天は無意なり。天は無意にして成る、人は作有つて成らず。天にして能く人を容る、人にして能く天に居る。天にして能く人に給す、人にして能く天に資る。未だ天人を辨ぜざれば、智に益無し。天は人に非ず、則ち天能く人に反す。人は天に資る、則ち人能く天に応ず。応ずるを以て天に有る者人に具はり、反するを以て我に有る者彼に殊なる。是を以て天、神を以て活し、人亦神を以て活す。為すは則ち神の道、成るは則ち天の道。成つて拵はざるは天道の誠なり、為して測らざるは神道の神なり。神にして且誠ならば、洋洋乎として日我に臨まん。有意、其の拵は測らず洋洋乎として日の我に臨む者を想像し、人を以て之を得んとす。彼の小兒の弄ぶ所の家鼠嫁娶の凶を見るに、其の舅姑夫妻朋友僕従は、其の首尾手足を鼠とし、其の衣帶裳服屋宅器械を人とし、納幣親迎より獻酬の礼・歌舞の数に至るまで人に非ざる者莫し。斯の凶固より笑ふべし。然りと雖も、人、人を提げて以て往く、是に於てか人、人に魅せらる、亦斯の凶と似たり。是の故に人を推拵して天地に至れば、天地皆人と為る。造化より約して人に至る人は造化に居す。蓋し物立し神活す、神は体を物に没し、而して用を氣に見はず。一感一応は鬼神の情状なり。而るに人、神を以て神と為さず、人を推して神を觀る。故に、風は風にして風なり雷は雷にして雷なり、而るに其の物を物とする能はず、雷公槌を提げ風伯囊を負ふ。日は則ち天子、龍は則ち龍王、天衣を纏はざれば

則ち衣裳を垂る。或は乃ち醜状畏るべく、或は乃ち和煦美好なり。是に於て、天地山海より禍福死生の為に至るまで、其の容貌を人とし其の情態を人となす、泥塑木偶も之を人事となす。天人混ざること久し。猶五家の春を以て春と為さず還つて木と為し、秋を以て秋と為さず還つて金と為し、礼を之れ火と謂い信を之れ土と謂ふがごとし。窺竅して微を正に失するなり。頗る怯人の夜行して芒華藤蔓を認めて滞醜山鬼と為す者に類す。嗚呼胡に長たる者は胡語せざるを得ず、越に長たる者は越語せざるを得ず。宜なるかな、儒仏及び諸子百家の習する所に薰染するや。其の以て素と為す者は未だ其の素に在らず。故に、夫れ人己の習する所を携へて己に非ざる者に適き、自ら誇つて我独り賢なりと曰ふと雖も、彼も亦自ら誇つて我独り賢なりと曰ふを如何ともする能はず。辨じて勝たず、曰く、唯自得するに在るのみと。彼も亦曰く、唯自得するに在るのみと。故に天地は、水火を容れ、動植を容れ、聖賢を生み、愚不肖を生み、醴泉を生み、砒石を生み、発収の氣を運び、瘴癘の毒を行ふ。是に於て、豎立の人・横走の獸・潜水の鱗・御風の翼・倒立の螺・傍行の蟹、同じく容れて其の天地を成す。人は身を此の間に容るるに其の意智の長を以てし、大いに天地万物を用ふ。業已に天地万物を用ふ、是に於て天地万物皆我の有と為す。故を以て日月星辰を曆象し、山川河海を区画し、其の水を灌漑し、其の火を燔灼し、土木鳥獸まで己の用に入らざる者莫し。唯我の有意に長ずるを以て、情慾の感応、意智の思辨、殺活予奪此に動き、而して安危治乱此れと従ふ。是に於て心の運為する所、善悪の悦怨すべき有り、智の分辨する所、是非の榮辱すべき有り。是に於て聖人性に率つて教へを立つ。道德の修むる所は仁義の生ずる所なり。故に偶中の男女を配して夫婦と成し、生生の尊卑を序して父子と成し、統属を分つて君臣を立て、教学に由つて師弟と成す。往來に賓主あり、交際に朋友あり。苟くも此の如くせざれば、即ち其の間を安んずること能はず。物有れば則有り、人の天を奉ずるや、天は唯無意にして一一並び立ち、

人は自ら有意にして偏以て偏を濟す。天我に給するに其の神を以てし、我に反するに意の有無を以てす。是を以て治も亦斯れ天地なり。乱も亦斯れ天地なり。之を修むるも人に従ひ、之を荒すも人に従ふ。唯天は神を以て機を転じ、誠を以て跡を収む。是を以て人の道たる、天に考へ人に扱ひ、古に学び今に行ひ、退いては以て己れを修め、進んでは以て人を安んず。己れを修むれば則ち己れを安んじ、人を安んずれば則ち人を修む。是に於て其の善の奉、其の惡の屏、其の是の榮、其の非の辱は、勢ひ然るなり。是を以て、其の世の為に教へを立つるの人、其の意は同じく己れを修め人を安んずるに在り。而かも其の設は則ち意匠同じからず、好尚或は異なる。各家相分れて各其の是非を守る。己れ顰蹙して彼は非なりと曰ふと雖も、彼の己れを視る猶我の彼に於けるがごとし。而して岐、岐を生じ派、派を分つ。之を己れの臆に取つて妄りに古人を引き、兄弟牆に鬩ぎ室家目を反す。修安の道訟庭の如く、卒に各怨家と為る。之を譬ふるに、是れ猶斯の味を嗜むの人の己れの嗜む所を人に尚らんと欲して、各自家の炮灸を忘るるがごとし。然れば則ち晉は嗜好する所無きか。我已に己れ有り、人と分立す。則ち我も亦猶人のごとし。何すれぞ独り嗜好無からん。唯自家鼎鼐の物を以て之を傍人に強ひざるのみ。若し人有つて指を染めんと欲すれば、亦何ぞ一豆の羹を惜まんや。晉の孖溪の上^{ほとり}に生るるは、乃ち天の晋に賜ふ所なり。晉の孖溪の上に老ゆるも、乃ち亦天の晋に賜ふ所なり。其の自ら其の量の人に若かざるを知つて蹇劣に安んずるは、乃ち己れの分なり。日出でて作り、日入りて息む。華吐けば則ち華に對し、実結べば則ち実を咀ふ。夫の天命を樂しみ、身を造物に附す。詩に之れ有り、曰く、昊天日に明、爾と出で往く、昊天日に旦、爾と遊衍すと。今茲に喋喋言ひて左右を煩はす者は、諸を左右に質すに非ず、亦左右の為に是とされん所を冀ふにも非ず。唯業已に存問を忝うす、但だ晋の是れ何物なるかを通じて、千里相報い、聊か以て餘年を娛まんと欲するのみ。長者如し擯斥すること無くんば、晋の

幸ひや至れり。且晋産物を好まざるに非ず、意は唯條理に在るのみ。地理を好まざるに非ず、亦求むるは全輿地に在り。南大洋中の土壤は、晋未だ其の領域を審かにせず。知らず蛮人近ごろ探索する者諸有り。宝曆癸未冬十月、筑前韓伯浦の舟子孫太郎、衆と海運して陸奥仙台に之き、洋中西北の風暴起するに会ふ。連日已まず、駛く東洋を度り、西洋に容与す。身崑崙に囚はれ、卒に闍婆に売らる。辛苦艱酸、明和辛卯夏六月を以て歸る。去る時は二十人、生還は唯一人のみ。阿蘭の賈舶之を贖うて来るに由る。地球小と為さず、躬親しく之を一周す、亦奇ならずや。唯、之子腹中物無し、一大奇事に遭ひて奇觀を盡す能はず。故に其の説徴するに足る者無し。最も恨むべしと為す。肅慎鞞鞞は古昔人蹟の通ずる所、今は則ち漂流の海舶も彼に到り此れに来るを聞かず。意ふに韓は蝦夷に接す、復甚しく遠しとせず、知らず其の風景嘗て考ふる所有りや。且つ聞く源君美氏蝦夷志を著はすと。渴望すること久し。帳中豈此れを蔵すること有る無からんや。有らば則ち一涉獵を許されよ。是を以て、地理産物・玄〔語〕贅〔語〕二語の外記する所無し。且つ書尾に語玄語の上木に及ぶ。天地大なり、造化の頤き、未だ軽々しく窺ふに易からず。日暮れて途遠し。書の成るは未だ知るべからず。況んや其の書贅〔語〕を加へて三十万言に且るにおいてをや。饒して成るも資の工に償ふもの無し。饒して資の工に償ふもの有りと、必ず世に售れざらん。第之を敝麓に蔵し、將に蟬の供たらんとす。瑣瑣小言、実に遼東の豕、引いて之を左右に獻じ、多に其の自ら知らざるを見はす。芭蕉布一端、聊か獻芹に代ふ。敢語一本、亦覆醬に充てられんことを。

註 原文（全集に依る）に間と誤植あり。明かに誤りと知れるものは正したるも、不明なるものは他日原本を見る機会を得て訂正せんことを期す。

- 『梅園哲学入門』（一九四三年六月、第一刷、第一書房）所収。
- 旧字は新字に改めたが、一部の漢字は旧字のままにした。
- 底本の振り仮名のほかに、読みやすさのために、適宜（現代仮名遣いで）振り仮名をつけた。
- PDF化にはL^AT_EX_{2 ϵ} でタイプセッティングを行い、dvipdfmxを使用した。

科学の古典文献の電子図書館「科学図書館」

<http://www.cam.hi-ho.ne.jp/munehiro/sciencelib.html>

「科学図書館」に新しく収録した文献の案内、その他「科学図書館」に関する意見などは、
「科学図書館掲示板」

<http://6325.teacup.com/munehiroumeda/bbs>

を御覧いただくか、書き込みください。